立ち読み版

Interview

吉藤 健太朗（よしふじ けんたろう）さん

株式会社オリィ研究所 代表取締役CEO
ロボットコミュニケーター

プロフィール：1987年，奈良県生まれ。工業高校時代に快適・安全な電動車椅子をチームで開発し，2004年に科学研究コンテスト「JSEC」（高校生・高専生科学技術チャレンジ）で文部科学大臣賞，翌2005年，米国で開催された世界大会「ISEF」（国際学生科学技術フェア）でグランドアワード３等を受賞。高専で人工知能を学んだ後，早稲田大学創造理工学部へ進学。在学中，自身の不登校体験をもとに孤独をなくすための分身コミュニケーションロボット「OriHime」を開発。2012年「人間力大賞」（日本青年会議所主催）準グランプリ，2014年「みんなの夢AWARD」グランプリ受賞，2016年「Forbes 30 Under 30 Asia」選出。2018年から取り組む分身ロボットカフェプロジェクトは「2020 60th ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS」の２部門でグランプリを受賞。著書に『「孤独」は消せる。』（サンマーク出版），『サイボーグ時代』（きずな出版）。通称の「オリィ」は特技の折り紙から。

ミッションは人類の孤独の解消

分身ロボットで仲間と目指す適材適所社会

［取材・文・写真］ 宮田 昌尚 中小企業診断士 ［写真］ 岡本 崇志

── The prologue

中小企業にとって働き方改革が本格施行された2020年，新型コロナウイルス対策としてテレワーク導入が推進された。コロナ禍は人と人の接触を遠ざけ，世界中が取り組むSDGs（持続可能な開発目標）にさまざまな形でブレーキをかけようとしている。個人も企業も，新しい価値観を取り入れながら，社会課題に向き合っていかねばならない。

この急展開の中，リモートコミュニケーションの開拓者である吉藤健太朗氏は，「孤独を解消する」という使命に全力で邁進している。まさに，新しい働き方を示し，「だれ一人取り残されない」というSDGsの理念に応えている。それは16年前，17歳の時に人生をかけて成し遂げると決めてから，真っすぐに突き進んできたものだ。

小学５年から中学２年まで引きこもり，死にたいほど苦しんだ経験，高校生の時に得た科学技術の道，「何者になるか」でなく「何をしたいのか」が大事だという気づき，それらが吉藤氏の人生のテーマを生んだ。分身ロボット「OriHime」を作り，寝たきりになっても社会参加できるツールを提供し，働き方も提案し続ける。そして集まってくる仲間とともに，ミッションを強力に遂行する。

働くということの意味，強力なミッションを持つ会社のあり方について，吉藤氏に聞いた。

「ゆっくりレジ」で活躍するOriHime。OriHimeはカメラとマイクを備え，手と首を愛らしく動かせる。AIではなく，人が遠隔コミュニケーションするロボットだ（写真提供：株式会社オリィ研究所）

新しい働き方の先導者

──テレワークが急激に増えていますが，分身ロボット「OriHime」（オリヒメ）はリモート・コミュニケーションの先駆者ですね。

現在，約600台が使われていて，一番多いのは会社です。テレワーク目的と，最近は障がい者雇用の利用も増えてきました。学校は意思決定が難しいようでまだ少ないのですが，使ってもらえるように突破していきたいところです。OriHimeは人の分身がそこに居るものです。単純にオンライン会議で情報を得るだけでなく，「ちょっと今度遊びに行きませんか」といった「無駄なコミュニケーション」こそ大事。存在に価値があると思っています。

──モスバーガーの店員としても活躍しています。

2020年７月下旬から東京の大崎店で実験的に導入されたんですが，関西在住の難病の方をはじめとするOriHimeパイロット（OriHimeを遠隔操縦する人）による「ゆっくりレジ」が人気になりました。外出困難な人に接客の仕事を可能にし，お客さんは会話を楽しみ，彼女たちに会うために来てくれるんです。

──オリィ研究所の経営はいかがですか。

会社設立から８年たち，従業員は約20名になりました。事業も研究だと思っているので，試行錯誤しながら仮説と検証を繰り返しています。2020年10月には，NTTと川田テクノロジーズ株式会社を引受先に，第三者割当増資で５億円の資金調達を行いました。ハードウェアベンチャーはモノを作るのにお金がかかる面があり，次の構想のために巻き込んでいけるパートナーは巻き込んでいきたい。

製品ラインアップは，テレワークに使われる小型のOriHimeのほか，もう１つ身長120cmの大きなタイプの「OriHime-D」があります。「分身ロボットカフェ」では，OriHime-Dが３～５台動いていて，全国各地に住んでいるカフェのパイロットたちが約30名にのぼります。目だけが動かせる重度肢体不自由の方に使ってもらえる，透明文字盤による視線入力装置「OriHime eye」もあります。

「分身ロボットカフェ DAWN」のOriHime-Dを通じた接客（写真提供：株式会社オリィ研究所）。「分身ロボットカフェDAWN」プロジェクトは，OriHime開発の盟友である番田雄太さん（2017年逝去）との構想，「たとえベッドで寝たきりだったとしても，仲間と共に働けるカフェ」を形にしたもの。ALS（筋萎縮性側索硬化症）など重度の障がいを持つ人やさまざまな理由で外出困難な人が，全国各地からOriHimeやOriHime-Dをパイロットとして操縦し，注文を取って飲み物を運ぶといった接客を行う。多くの協賛や協力を得て，2018年11月～2020年１月に期間限定で４回開催されている。

適材適所社会をつくる

──「テクノロジーで孤独を解消する」というミッションをホームページでも強調されていますね。

17歳の時に「人生30年計画」を作って，残りの13年をかけて人類の孤独を解消する方法を研究すると決めました。ISEF（国際学生科学技術フェア）に電動車椅子の研究で出場して名誉な賞をもらった

⇒続きは雑誌で